

寺本沙也加<sup>1</sup>：沖縄県久米島におけるニシキガイ（二枚貝綱：イタヤガイ科）の漂着記録  
 Sayaka TERAMOTO<sup>1</sup>：Stranding record of *Chlamys (Azumapecten) squamata* (Gmelin, 1791) (Bivalvia: Pectinidae)  
 in Kumejima Island, Okinawa.

ニシキガイ *Chlamys (Azumapecten) squamata* (Gmelin, 1791) は、イタヤガイ科に属する二枚貝であり、房総半島以南から九州までの日本各地、東シナ海、西太平洋に分布している（肥後・後藤 1993；速水 2017）。これまで、沖縄県では、未記載種を除く約30種のイタヤガイ科が確認されているが（黒田 1960；久保・黒住 1995；波部・土屋 1998；黒住ほか 2001；名和 2010）、ニシキガイの正確な記録はない。今回、沖縄本島の西方約100kmに位置する久米島において（図1）、沖縄県から初記録となるニシキガイの漂着を確認したので報告する。

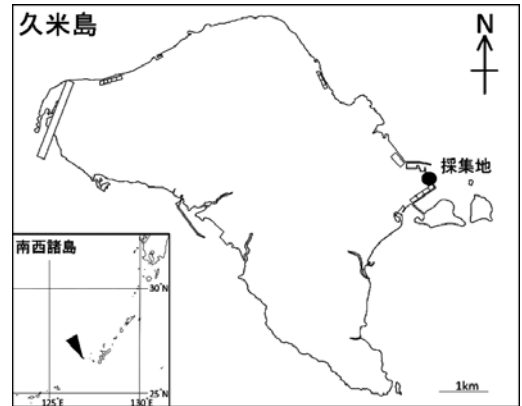


図1 久米島の位置と採集地。

*Chlamys (Azumapecten) squamata* (Gmelin, 1791)  
 ニシキガイ（図2-A, B）

**採集状況** 2018年3月6日、沖縄県久米島町宇根付近の海岸（図1）で2個体の死殻が打ち上げ採集された。付近には、ペットボトル・発泡スチロール・漁具・プラスチック製浮きなどの漂流ゴミが大量に打ち上げられており、久米島では定着が確認されていないムラサキイガイ *Mytilus galloprovincialis* Lamarck, 1819が付着したままの浮きの漂着なども多数確認された（図3）。

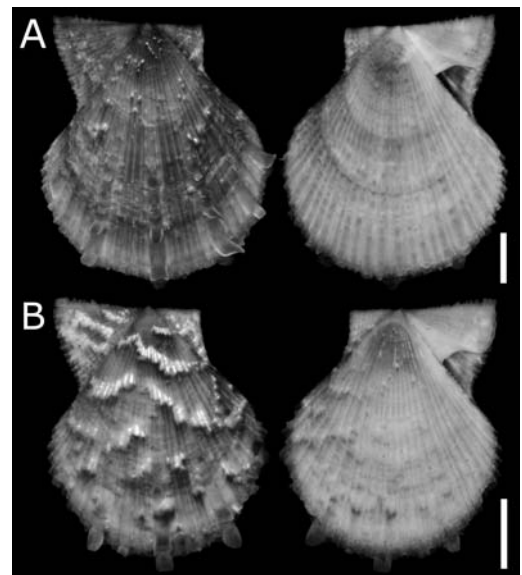


図2 久米島で採集されたニシキガイ（個体A及びB）。スケールバーは5mm。

**形態** 今回得られた2つの標本は、合弁の小型個体で、やや縦長の扇型をした主部と前後の耳状部からなる。個体Aは殻長26.2mm、殻幅22.3mmであり、個体Bは殻長19.0mm、殻幅16.3mmであった。それぞれ左殻は右殻より膨らみ、足糸湾入は深い。櫛歯は退化しない。左殻には鱗片を備えた強い肋が6本あり、その間に細い肋が2～4本ある。右殻は鱗片が発達せず、26～30本の細い肋がある。殻色は、個体Aが左殻は赤褐色、右殻は薄桃色を呈し、斑紋はない。個体Bが左殻は薄紫色、右殻は紫褐色を呈し、雲状斑がある。

**備考** 今回得られた個体をニシキガイと同定した理由として以下の2点が挙げられる。①個体A, B共に、左殻には鱗片が発達し弱く膨らむが、右殻はとげだたず平らであるというニシキガイの特徴（奥谷 2006；速水 2017）を有していた。②両殻共に均等に膨らむというアズマニシキガイの特徴（吉良 1954）と異なっていた。また、ニシキガイの近縁であるアズマニシキガイ *Chlamys (Azumapecten) farreri nipponensis* Kuroda, 1932とアカザラガイ *Chlamys (Azumapecten) farreri akazara* Kuroda, 1932は分子系統解析によって同種とされたが（Yuan 2012）、ニシキガイとアズマニシキガイの関係性は分かっていない。



図3 久米島に漂着した発泡スチロール製浮きに付着したムラサキイガイ。

次に、ニシキガイが久米島に漂着した理由を考察する。今回の採集地付近には沖縄県外、及び国外から流されてきたと思われる漂流ゴミが大量に打ち上げられており、そのなかには軟体部が残ったままの新鮮なムラサキイガイが付着した

発泡スチロール製浮きも確認された。ムラサキイガイは、沖縄県において本格的な定着には至っていないものの（照屋 2016）、生きた状態で久米島近海まで到達した可能性が高い。同様に、主な生息海域で漁具等に付着したニシキガイが、漁具ごと漂流し、久米島に漂着した可能性が考えられる。漂着したニシキガイは、乾燥などによって漁具等から脱落し、砂浜に落ちたものを今回発見したと推察される。

筆者は、久米島において潮間帯から水深50mまでの貝類相調査を3年間ほど行っているが、これまでニシキガイを確認したことはなく、現時点では定着はしていないと思われる。しかしながら、今後、久米島を含む沖縄県内に定着する可能性もあるため、継続的なモニタリングの必要性があると考えられる。

謝辞：田中真人氏、久保弘文氏には種同定するにあたって有益な助言を頂いた。照屋清之介氏にはアズマニシキガイに関する文献を頂いた。以上の方々に厚く御礼申し上げる。

## 引用文献

- 波部忠重・土屋光太郎. 1998. 阿嘉島周辺海域軟体動物目録. みどりいし, 9: 15-25.
- 速水 格. 2017. イタヤガイ科. In 奥谷喬司 (編著). 日本近海産貝類図鑑【第二版】. pp.534. 1191. 東海大学出版部, 神奈川.
- 肥後俊一・後藤芳央. 1993. 日本及び周辺地域産軟体動物総目録. 854pp. エル貝類出版局, 大阪.
- 吉良哲明. 1959. 原色日本貝類図鑑. 239pp. 株式会社保育社, 大阪.
- 久保弘文・黒住耐二. 1995. 沖縄の海の貝・陸の貝. 263pp. 沖縄出版, 沖縄.
- 黒田徳米. 1960. 沖縄群島産貝類目録. 104pp. 琉球大学教務部普及課, 沖縄.
- 黒住耐二・大須賀健・石川 裕・竹ノ内孝一・宮城弘樹・村山 望. 2001. 沖縄島北東岸のサンゴ礁性貝類相の現状調査. プロ・ナトゥーラ・ファンド助成成果報告書, 12: 17-31.
- 名和 純. 2010. 琉球大学資料館（風樹館）二枚貝類標本目録. pp.234. 琉球大学資料館（風樹館）, 沖縄.
- 奥谷喬司. 2006. 日本の貝 2. 204pp. 株式会社学習研究所, 東京.
- 照屋清之介. 2016. 沖縄県渡嘉敷島におけるムラサキイガイの漂着記録. 漂着物学会誌, 14: 50.
- Yuan Yuan・Manami Kanno・Akihiro Kijima. 2012. Genetic diversity of wild populations of *Chlamys farreri* in Japan and their genetic relationship with cultured stocks in China. *Aquaculture*, 370-371: 109-122.

(Received Aug. 30, 2020; accepted Oct. 15, 2020)

<sup>1</sup> 〒901-3104 沖縄県久米島町真謝500-1 沖縄県海洋深層水研究所

<sup>1</sup> Okinawa Prefectural Deep Sea Water Research Center, 500-1 Maja, Kumejima-cho, Okinawa, 901-3104 Japan